

保守メンテナンス手法の変革の取り組みについて ～線路設備診断システムの運用開始（在来線）～

JR西日本では、人口減少や少子高齢化、人材確保の困難などの様々な社会課題に対して、持続可能な社会の実現に向けて「鉄道事業の活性化と構造改革」の一つとして保守メンテナンス手法の変革の取り組みを進めています。

このたび、線路の保守メンテナンス手法の見直しとして、2024年8月から在来線におきまして線路設備診断システムの運用を開始しましたので、お知らせします。

1. 線路設備診断システムの概要

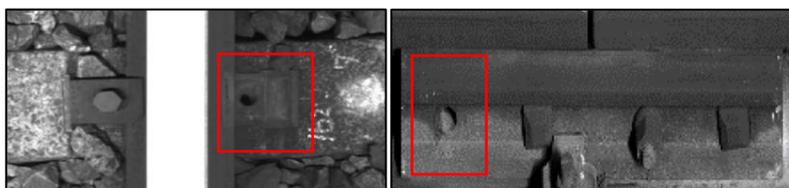
線路設備診断システムは、総合検測車(DEC741)に装置を搭載して電化区間で運用します。総合検測車の走行にあわせて線路設備を測定し、検知した不具合を現場区所に配信することで、適切な保守に繋げることが可能となります。

2. 保守メンテナンス手法の見直し

線路状態の確認として定期的に徒歩による巡視を行ってありますが、線路設備診断システムの導入により、ロングレール構造区間を対象に巡視の回数を運用前の半減に見直すこととしました。



装置を搭載した総合検測車（DEC741）



(a)レール締結装置脱落 (b)継目ボルト脱落
検知した線路設備の不具合（例）

今回ご案内の取り組みは、SDGsの17のゴールのうち、特に9番、11番に貢献するものと考えています。



JR西日本グループは持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

